

概要報告

実施期日	7月29日(火)【午前】
部会名	小学校 国語部会

テーマ 『子どもの読みを深める国語の授業—ものの見方を学んで文学教材を読む—』

提案概要

今、「読むこと」の領域では、物語を読み深めるため、児童一人ひとりが自分の考えを適切に表現し、相互理解することが必要とされている。そのために、言語活動の充実、「伝え合う力」の育成が求められている。自分の思いや考えを友達に伝えること、友達の考えを聞いて自分の考えに生かすことが大切である。

しかし、物語を読んだ時に、登場人物に感情移入し、自分の考えや思いをもつことが苦手な子どもが多い現状から、子どもたちが教材の世界に深く入るためには、「伝えるべき何か」を意識して、自分と向き合い、自分の考えをもち、読み深められるような授業が必要と考えた。さらに、その考えを互いに伝え合うことで、ものごとの本質に気づき、自分自身を良い方へ変容させていく。それが教室で文学教材を学ぶことの意味であると考えた。

そこで、文学教材を通してものごとの本質を見る方法を学び、自分の生き方を考えるために、「意味づける」という考え方に基づいた授業を実践した。『わらぐつの中の神様』では、特に「ものが人間を意味づける」という視点を子どもに示し、『わらぐつの中の神様』にこめられた真心や思いやりといった、人間の心の中にある美しいものを、みんなで共有し、味わう授業を目指した。

具体的には、「物語が誰の視点に因るものかを常に意識しながら読む(同化・異化体験をする)」「比較(類比・対比)して考える」「理由・根拠を明らかにする」「関連づける」「意味づける」といった認識の方法を子どもたちに提示しながら、授業を進めた。

授業は、場面を区切って読み込み、発問に対する考えをノートに書き、発表して話し合うスタイルで行っていった。板書を写すことに気をとられて、思考したり友達の意見を聞いたりすることに集中できなくなる子があるので、自分の意見をまとめる手段としてはノートを活用させたものの、教師が板書したことをすべて書き写すことはあえてさせないようにした。

板書・ノート・話し合いのもち方といった基本的な部分では、もっと効果的なやり方があるのではと感じたが、言葉の響きを大切にしながら一文一文を丁寧に読み、「視点の確認」「比較の方法」「関連づける」「意味づける」という具体的な認識の方法を提示していくと、子どもたちはそれらを駆使して、驚くほど素直に物語を読み、自分の考えを深めることができた。それは、自分が子どもと一緒に読み手となることができたからだと思う。子どもたちの深い読みに気づき、感動するためには、教師自身の深い読みと多様な解釈がなければ成り立たないと思う。教師がその作品をどう読むかが、子どもの読みを深めるためのポイントとなるという思いを新たにした。

質疑概要

- ・「ものが人間を意味づける」というのは、他の教材にも共通しているのか?
→それは、『わらぐつの中の神様』での意味づけ。作品によって意味づける内容は違う。
この意味づけによって、今までなかった価値観が子どもの中に生まれた。
- ・子どもに、「今やっていることはすごいことなんだよ」と意味づける…価値づけることが意欲につながるのだろう。
→委員会活動や卒業式など、普段の活動や行事にも意味づけをしている。そうすることで、子どものやる気につながっているところはあると思う。
- ・意味づけることが興味深い。国語で意味づけるのは難しいと思うが、子どもが意味づけできるようにするために、国語でどんな実践をしてきたのか教えてほしい。
→子どもには難しいかとも思ったが、美の価値と用の価値(機能的)という言葉で提示してみた。一度教えたら、授業の中で子どもが多用していった。テーマは自分でしぼられていたので、対比して示していった。

・行動が分かるところ、気持ちが分かるところ、など教科書に線を引かせたりしているが、3年生で、様子が分かるところにうまく線が引けなかった。子どもに発問がよく伝わらなかったことはあるか？また、その時どうしたか？

→教科書にそのまま書いてあるところは、すぐ出てくる。教科書の記述そのまま答えればよいのではないような発問には、考える時間をたっぷりあげている。

授業の中でリズムができてくると、スムーズに行く。「様子」について読み取る活動を何回か繰り返していけば、そのうち子どもが分かってくる。初めは質問を具体的にするとよい。

研究協議概要

協議の柱 ●文学教材の読みを深める、とは？

●思考力・判断力・表現力等を育む学習プロセスづくりの工夫

3～4人のグループでの協議では、今日の提案の中で気づいたことや提案から学んだこと、日頃国語の授業について感じている疑問等について、記録用紙を考えを整理するメモとして利用しながら、35分間話し合いを行った。前半の質疑で話題となった「意味づけ」について、普段子どもの読みを深めるために授業で工夫していること、系統的に指導していくことの必要性等々、グループによって話題は様々だったが、どのグループも活発に協議が行われていた。

〈グループ協議後の発表から〉

- ・物語文と説明文とは読み方が違うことを教えている。
- ・本文にとらわれすぎず、言い換えて表現させるなどして、ボキャブラリーを増やすことも必要。
- ・子どもに切実感がないと、教材に関心を示さない。お互いモチベーションが高い中で授業するためには、どうしたらよいか考えていく。
- ・友だちどうしの関わりの中で、違う視点に気づき、思考力が深まる。
- ・自分をもっていきたい方向ではないところに子どもの考えがいったとき、国語だから答えがなく、「発表できてよかったね」などと、教師の曖昧な返答で終わってしまうことが多々ある。子どもに達成感をもたせるにはどうしたらよいのだろうか？

→自分の中にもものさしがないと、いっぱい意見が出たからよい、というふうになってしまう。自分（教師）がどう読むかが大事。教材研究をしっかりと（本を読んだり、他の人と話し合ったり）。

今日の提案資料の中の子どもの読みを、客観的にどう思われるかはわからないが、自分では深まったと思える。子どもは必ず、教師を超える読みをする。

まとめ概要

- ・先生が子どもに伝えたい熱い気持ちが、きっと子どもたちにも伝わっている。
- ・急がず待つことや、教材研究の深さ、しかもそのために伝えたいことは多くなるはずなのに授業では謙虚に後ろにさがることで、先生の想定を超えた子どもの読みが出てきた。
- ・日々の生活の中での意味づけで、子どもたちが自分の思いを伝えたいという気持ちを大切にしている。
- ・ノート指導では、子どもが認められたと実感できるような具体的なアドバイスがされていた。
- ・物語教材に対する価値を問い続け、授業者自身がこの教材に新たな価値を見出し、情熱を注いだことの意味は大きい。
- ・教育課程は、計画だけでなく学びの履歴も含めたもの。学んだことを振り返ることができる提案資料なので、子どもが読みを深めた場面はどこかを参加者一人ひとりがしっかり読み取ってほしい。
- ・今日の提案は「言葉ってなんだろう」という問いかけでもあった。子どもが発した言葉に、教師が価値づけし、新たな価値観が生まれた。教材を読み終えた後の子どもの感想では、題名にある「神様」のイメージが多様になっていることが分かり、まさに「読み深める」ことができたと感じる。